

## 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究

美山, 理香  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/887>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.27-35, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究

美山 理香 九州大学大学院人間環境学府

## The study about the psychological distance with the friend of university students

Rika Miyama (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purposes of this paper are examination of the reliability and the validity of the projective measuring method on the psychological distance with the friend of university students and presentation of basic data. In Study 1・2, the relation between psychological distance and depth scale of the relation and degree of the relation close was examined. In Study 3, the content of “it brings it close” and “it is kept away” were collected by the free description. The results were as follows; ① The psychological distance changes in sex and sex of the friend. ② The psychological distance was related to depth of the relation, relation close and familiarity. Therefore, the validity of the method was verified. ③ There are “closeness”, etc. at the content of “it brings it close”, and there are “disclosure and understanding”, etc. at the content of “it is kept away”. In 《friend → self》, it was proven that the distance of “it brings it close” was smaller than that of “it is kept away”. Therefore, it seemed to ensure the reliability of the projective measuring method.

**Keywords:** Psychological distance, University student, friendship

## 1. 問題と目的

人は人とかかわり合いの中で生きている。子どもから大人への過渡期である青年期は、対人関係が広がっていく時期であり、特に同年代の友人関係が重要であるといわれてきた。近年通信機器の発達に伴い、青年が友人とコミュニケーションをとる手段は家庭の電話からポケットベル、携帯電話や電子メールへと変わってきている。顔を合わせていない時間にもこういった通信機器で連絡を取り合う彼らは、物理的な距離が離れていることはあまり問題ではないようで、現代青年は友人と通信メディアを通して密着した関係を築いているように見受けられる。しかしながらその一方で、青年の友人関係における心理的距離が遠いものになっているという指摘がある。松井（1990）は、「最近の青少年のなかには、友人との全人格的な融合を避けて、距離を保ち、一面的で部分的な関係にとどめようとする疎隔的、部分的な志向性が表れている」と述べている。また、相手とどのように心理的距離をとるかということが、現代青年の友人関係において重要なポイントになっているといわれている（長沼・落合, 1999）。

心理的距離にはいくつかの定義がある。山口・土屋・藤本（1996）は、生徒-教師間に存在する心理的距離を扱い、「ある人とある人との間に存在する二者間の親密度・親和性・親近感の度合いや程度を表す概念」と定義している。この定義では親密度とはほぼ同義であるといえるが、それでは「距離」という意味合いは消えてしまう。また、友人との関係における心理的距離を扱った天貝

（1996）の定義によると、心理的距離は他者との親密さの程度（親密性）と他者との融合の程度（依存性）の両面から成り立つとしている。さらに、友人関係において、相手にどれだけ親しみを感じ近づいていくかということと同時に、相手から遠ざかる方向に距離をとるということも体験されているために、単に「親密」というだけではなく「心理的距離」という語が用いられているのではないかと考えられる。互いに独立した個人として関係を保つには、相手との間に適度な距離が必要である。「距離」には、相手と融合しない、独立した個人としての自分であることや、相手に干渉しない、相手と関わらないことなども含めたいくつもの意味を持つと考えられる。現代青年の友人関係が希薄で一見「距離をおいた」ものに見られていることから、相手を遠ざける、あるいは自分が遠ざかろうとする心の動きにも注目する必要があるといえよう。これらのことを踏まえて、本研究における心理的距離は、友人との間に存在する二者間の親密さの程度であり、近づこうとする動きと遠ざかろうとする動きの両方があると考えられる。

友人とのかかわりは、自分から相手への一方通行の感情や行動だけでは成り立たず、常に相手側の感情と行動が絡んでくる。そのため、友人との心理的距離を考えるとき、相手の視点を青年がどのように受け止めているのかということを考慮する必要がある。山根（1987）は、「対人関係という相互に独立した主体がかかわり合う場においては、自己の相手（対象）に対する心理的距離だけでなく、それとは別に相手の自己に対する心理的距離というものも体験される」と述べている。石田（1998）

の研究においても、友人関係の親密性の認知を、「相手に対する親密性」と「相手からの親密性の推測」という二つの方向から測定している。自分の気持ちを確認し、同時に相手の気持ちを推定することによって、相手に対する行動を決めているだろう。あるいは、相手の行動から、相手の、自分に対する感情を推定し、それによって相手に対する感情が左右されることもあるだろう。したがって、本研究では、自分から相手を位置づける心理的距離（以下、《自分→相手》）と、相手の気持ちを推定することによって得られる心理的距離（以下、《相手→自分》）を取り上げる。いずれの心理的距離もある友人との関係において固定的なものではなく、状況に応じて動くものであると考える。前述の定義を踏まえると、《自分→相手》においては相手が自分に近づこうとする動きと、相手が自分から遠ざかろうとする動きがあり、《相手→自分》においては自分が相手に近づこうとする動きと、自分が相手から遠ざかろうとする動きがあるということになる。2つの心理的距離に共通して、近づこうとする動きを「近づけ」、遠ざかろうとする動きを「遠ざけ」と呼ぶこととする。

それでは友人との間に存在する心理的距離はどのように測定するのが適当だろうか。これまで対人関係における心理的距離について、いくつかの測定方法が用いられてきた。山口（1994）では生徒の対教師の心理的距離を「父親基準スケール」で測定している。これは父親との心理的距離を1とすると教師との距離がいくつになるのかを問うものである。友人関係を測定したものには、上野・上瀬・松井・福富（1994）があり、高校生の友人との心理的距離を4つの質問項目によって測定している。また、天貝（1996）は○を添えた線分を示し、その線分上に教師（最も親しい・普通の）、友人（最も親しい・普通の）および家族を示す印を書き込ませ、その点間距離を心理的距離と見なすという投映的方法を用いている。この方法では、線分に添える○を相手に替えることで、《自分→相手》と《相手→自分》を測定することが可能である。さらに、図で表されるため、変化や動きを視覚で捉えやすい。そこで本研究では天貝（1996）の測定方法に準拠し、大学生の心理的距離に関する基礎的データを収集することとする。具体的にはこの投映的方法で測定された心理的距離について、関係の親密さと親密性、依存性との関連を検証し、妥当性を検討する。また、《自分→相手》と《相手→自分》の関係についても検討する。次に心理的距離における「近づけ」と「遠ざけ」がどのようなもので、どのようなことから起こるのか、その内容の収集、整理を行う。これによって本研究における定義に沿った現象が測定できているかどうかを確認する。つまり、測定方法の信頼性を検討する。

そのためにまず、調査1では一人を特定化させる範囲

を「周囲の人」とし、幅広い相手との心理的距離について、性別の組合せによる違いを明らかにする。さらに、相手との関係の親密さとの関連を検証する。相手との関係が親密であれば心理的距離は小さくなると考えられるため、これによって妥当性を検討する。続く調査2では一人を特定化させる範囲を「同性の友人」と絞り、天貝（1996）にならって親密性と依存性との関連を検証する。さらに調査3で、心理的距離における「近づけ」と「遠ざけ」の内容の収集を行う。具体的には調査2において回答した同性の友人との心理的距離について、なぜ相手（あるいは自分）をそこに位置づけたのかということ的自由記述によって収集し、「近づけ」と「遠ざけ」に分類し、内容を整理するという方法をとる。

以上より本研究は、大学生の友人とのかかわりを捉えるための基礎的研究と位置づけ、心理的距離の投映的方法について信頼性と妥当性を検討すること、加えて大学生の友人との心理的距離に関するデータの収集及び整理を目的とする。

## II. 調査 1

### 1. 方法

#### (1) 材料

①心理的距離の測定 心理的距離の測定には、天貝（1996）の用いた投映法による心理的距離の測定法を差が測ることのできるように修正を加えて使用した。心理的距離は左端に○を添えた9.5cmの線分を示し、次のような教示によって、自分から相手までの距離と、相手が思っているだろう自分までの距離の2種類を示すように求めた（Fig.1）。その際、基準となるように線分の右端を全く知らない人と設定した。なお、評定は測定誤差を考慮し、点間距離を0～9.5cmまで0.5cm刻みの20段階で評定した。

《自分→相手》：「下に示す図において、あなたが一番左端の○のところにいるとします。一番右端は全く知らない人としてします。次にあげるそれぞれの人は、あなたの気持ちからどのくらいの距離にいますか」

《自分→相手》；線分上に相手を●として記入

○

あなた

《相手→自分》；線分上に自分を○として記入

●

相手

Fig.1 心理的距離の測定方法

《相手→自分》：「今度は、あなたの思い浮かべた人が一番左端の○のところにいるとします。一番右端はその人が全く知らない人として。次にあげるそれぞれの人はその人の気持ちからどのくらいの距離にいると思いますか。その人がどのように思っているかを想像して、あなたの推定するところに、印を付けてください」

②関係の深さ尺度 心理的距離として①の尺度を用いるが、修正を加えたため、妥当性の検討として②関係の深さ尺度との相関を調べる。②は、4項目からなり、特定関係における関係の性質を測定するのに有効とされている。橋本(1996)によって関係の深さ尺度が親密性とパラレルであることが確認されている。本研究では、相手が自分に対して感じている距離が重要なので、修正を加え8項目とした。

(2) 調査対象及び調査時期

調査対象はX県内の大学生412名(男性210名、女性202名)。平均年齢は20.75歳(SD=0.92)である。調査期間は1997年11月。心理学関係の2つの授業時間内で配布、記入、回収を行った。

2. 結果及び考察

(1) 尺度について

まず、②関係の深さ尺度に関して、《自分→相手》と《相手→自分》の4項目ずつに分け、先行研究に従い項目尺度相関を求めたところ、.75~.85(p<.001)の範囲内にあり、先行研究の.50以上を満たした。それぞれのα係数は.77と.84であり、内的整合性はあると考えられた。

次に、①で測定した2種類の心理的距離(《自分→相手》、《相手→自分》)と②で4項目ずつの得点に関して相関を調べた。その結果、それぞれ-.57と-.63(p<.001)と、比較的強い負の相関が認められた。これにより、関係が深いと感じられていると心理的距離は小さくなるといえ、①の尺度の妥当性が確認された。

(2) 性別の組合せによる心理的距離の検討

2種類の心理的距離それぞれについて、被調査者の性別(男、女)と被調査者が思い浮かべた対象(同性、異性)を要因とし、心理的距離を従属変数とした2要因の分散分析を行った。結果をTable 1に示す。

《自分→相手》、《相手→自分》ともに被調査者の性別の主効果が有意であり、女性が男性よりも距離を小さく回答している(p<.001)。したがって、心理的距離は性別によって様相が異なることが分かった。女性は相手の性に関係なく距離は概して小さい。天貝(1996)では「最も親しい」友人に対する心理的距離に性差が見られ、男子よりも女子の方が距離が近かったことが示されており、大学生の周囲の人に対する心理的距離でも同様であることがわかった。

(3) 《自分→相手》と《相手→自分》の関係

各被調査者の《自分→相手》と《相手→自分》の評価点を比較し、以下の3つのグループに分けた。a《自分→相手》=《相手→自分》、b《自分→相手》>《相手→自分》、c《自分→相手》<《相手→自分》。被調査者と想定した友人の性別組み合わせと3グループをクロス集計したのがTable 2である。全体にグループbの人数が少ない。組み合わせ別では、異性の組み合わせでは

Table 1 性別組み合わせによる心理的距離評価点の平均(SD)と分散分析結果

	男→男 (N=135)	男→女 (N=75)	女→男 (N=84)	女→女 (N=118)	交互作用	性別	組み合わせ
《自分→相手》	5.82 (3.65)	5.52 (3.55)	4.30 (3.52)	4.35 (3.12)	n.s	15.34***	n.s
《相手→自分》	7.10 (4.14)	6.59 (4.22)	5.05 (3.87)	5.28 (3.83)	n.s	17.05***	n.s

\*\*\*p<.001

Table 2 性別組み合わせとグループの人数クロス集計

	男→男	男→女	女→男	女→女	計
a 《自分→相手》 = 《相手→自分》	40 (29.63)	30 (40.00)	38 (45.24)	40 (33.90)	148 (35.92)
b 《自分→相手》 > 《相手→自分》	26 (19.26)	13 (17.33)	15 (15.86)	18 (15.25)	72 (17.48)
c 《自分→相手》 < 《相手→自分》	69 (51.11)	32 (42.67)	31 (36.90)	60 (50.85)	192 (46.60)
計	135	75	84	118	412

※( )内はカテゴリの人数に対する百分率

グループ a, c の人数はほぼ等しいが, 同性の組み合わせではグループ c の方が多くなっている。同性組み合わせに友人関係が, 異性組み合わせに恋愛関係が多く含まれていると考えると, 友人との心理的距離では c のようなバランスを取ることが多いといえる。相手から見た自分の位置づけを自分から相手を見たときよりも遠くするということであり, 互いの気持ちを確認することが少ないと思われる友人関係では, 相手の気持ちについて自信がないのかもしれない。

(2)の結果と合わせると, 大学生の周囲の人に対する心理的距離は性別によって, また相手の性別によってその様相が異なるといえる。

### III. 調査 2

#### 1. 方法

##### (1) 材料

①心理的距離の測定 心理的距離は, 調査1で妥当性が示された測定方法を用いて, 《自分→相手》, 《相手→自分》を測定する。なお, 教示は調査1と同様である。

②関係親密度 山中(1994)において, 二者関係の親密さの基準として用いられている。好意度, 関係関与度, 関係のラベリングの3項目について1点から7点で評定され, その平均評定値をもって関係親密度得点となる。調査1では関係の深さ尺度によって妥当性が検討された。さらに調査2では想定させる相手を同性の友人に限定し, その心理的距離の測定について, 関係親密度によって妥当性を検討する。

③対人的関係性尺度 依存性, 親密性, 関係性の拒否の3因子, 27項目からなる質問紙で, 測定されるのは意識的な対人態度である(石谷, 1994)。5段階で評定され, 因子ごとの合計点をもって各因子得点とする。天貝(1996)は心理的距離には「他者との親密さの程度」の側面と発達の一過程としてみた「他者との融合の程度

(依存性)」の側面があると考え, 心理的距離の測定が, 実際に他者との親密さの程度と融合(依存)の程度の2側面を反映するものであるかどうかを検討するため, 対人的関係性尺度の「親密性」および「依存性」2下位尺度を, 被調査者の一部(高校2年生137名)に同時に実施した。その結果, 各々の対象によって程度は異なるが, 他者との親密性と依存性という2側面を反映することを示すと考えられた。今回は被調査者は大学生であり, 想定する対象も「同性友人」の一人のみであるため, 大学生の同性友人に対する心理的距離に「親密性」と「依存性」が関連しているかどうか, 関連しているのならどの程度のものであるかを検討する。

##### (2) 調査対象及び調査時期

調査対象は大学生177名(男性, 102名, 女性, 75名)。平均年齢は20.37歳(SD=1.50)である。調査時期は1999年6月~7月。心理学関係の2つの授業時間内で配布, 記入, 回収を行った。

#### 2. 結果及び考察

Table 3に男女それぞれの記述統計量と性差のt検定の結果を示す。これを踏まえて心理的距離の測定方法の妥当性を検討し, さらに基礎的なデータの提示を行う。

##### (1) 心理的距離

《自分→相手》においても( $p<.01$ ), 《相手→自分》( $p<.05$ )においても, 女性よりも男性の方が心理的距離を小さく感じているということが示された。この結果は調査1と天貝(1996)の結果を支持するものである。

##### (2) 心理的距離と関係親密度

Table 4は男女それぞれの心理的距離と関係親密度得点及び対人的関係尺度の各下位尺度得点との相関値を示したものである。男女ともに2種類の心理的距離と関係親密度の相関は高い。

##### (3) 心理的距離と「親密性」「依存性」

男性においては2つの心理的距離のうち, 《相手→自

Table 3  
性別による各尺度の平均(SD)と性差t検定結果

	得点範囲	最小値-最大値	男 (N=102)	女 (N=75)	t 値
《自分→相手》	1-20	1-19	6.21 (4.40)	4.55 (3.61)	2.67**
《相手→自分》	1-20	1-19	6.76 (4.34)	4.34 (3.43)	2.32*
関係親密度	1-7	1-7	5.50 (1.20)	5.86 (0.85)	-2.24*
依存性	11-55	13-53	35.42 (8.29)	38.55 (7.10)	-2.63**
親密性	7-35	9-35	23.07 (6.27)	26.54 (6.33)	-3.62***
関係拒否	10-50	11-44	29.38 (7.29)	28.86 (7.05)	0.48

※\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

**Table 4**  
各尺度の相関係数

	《自分→相手》	《相手→自分》	親密度得点	依存性	親密性
《相手→自分》	.815***				
	.860***				
親密度得点	-.639***	-.583***			
	-.588***	-.541***			
依存性	.113	.135	-.086		
	-.115	-.061	-.065		
親密性	-.144	-.218*	.319**	.150	
	-.291*	-.385***	.436***	.191*	
関係の拒否	-.008	.030	.011	-.124	-.093
	-.138	.074	-.179	-.177	-.349**

※\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001. 上段男性, 下段女性

**Table 5**  
性別組み合わせとグループの人数

	男→男	女→女	計
a 《自分→相手》 = 《相手→自分》	43(42.16)	31(41.33)	74(41.81)
b 《自分→相手》 > 《相手→自分》	21(20.59)	13(17.33)	34(19.21)
c 《自分→相手》 < 《相手→自分》	38(37.25)	31(41.33)	69(38.98)
計	102	75	177

※ ( ) 内はカテゴリーの人数に対する百分率

分》のみが「親密性」との相関がやや高く、「依存性」との相関は見られなかった。女性では、《自分→相手》と《相手→自分》の両方と「親密性」との相関がやや高く、「依存性」との相関は見られなかった。相関係数に負の符号がついたことから、「親密性」が高い人ほど心理的距離を近くつけるといえる。この尺度における「親密性」とは個人特性であり、あてにできる人物がおり、そこから得られる安心感をもとに自己が安定していられるという関係意識を主とするものであった。天貝(1996)では高校生の友人および家族に対する心理的距離と親密性の有意な関連を見出しており、その結果を支持するものである。自己が安定していられると、相手との関係を近く感じることができ、またそのように回答できると考えられる。

(4) 《自分→相手》と《相手→自分》の関係

各被調査者の《自分→相手》と《相手→自分》の評価点を比較し、以下の3つのグループに分けた。a 《自分→相手》 = 《相手→自分》, b 《自分→相手》 > 《相手→自分》, c 《自分→相手》 < 《相手→自分》。被調査者の性別と3グループをクロス集計したのが Table 5で

ある。調査1で見られたように同性の友人に対する心理的距離では、《相手→自分》を大きく感じる、あるいはそのように回答する大学生が多い。

IV. 調査 3

1. 方法

(1) 材料

調査2と同時に以下の質問によって自由記述を求めた。

① 《自分→相手》について、「相手」をそこにつけたのはどうしてですか。

② 《相手→自分》について、「あなた」をそこにつけたのはどうしてですか。

(2) 調査対象及び調査時期

調査2と同一である。

(3) 分析方法

心理学専攻の大学院修了者3名によって以下の作業を行った。まず自由記述の内容について「近づけ」、「遠ざけ」それぞれに当てはまる表現を抽出した。その際「わからない」というもの、無回答のものは除いた(49名)。

**Table 6**  
自由記述の分類結果

心理的距離	カテゴリー	項目	代表例
《自分→相手》	「近づけ」 (N=101)	親しさ (N=33) 開示・理解 (N=31) つきあいの長さ (N=13) 距離 (N=13) 信頼 (N=5) 考え方 (N=3)	今、一番仲の良い友達だから 思ったことを大体言っているし、いろんなことを話せる相手 つき合いが長く親しい人 関係的に近いと思った 相手のことを信頼できるし、尊敬できるところもある すごく考え方で似ているところが多い
	「遠ざけ」 (N=57)	開示・理解 (N=17) 時間・場面の限定 (N=14) 距離 (N=13) 他の関係と比べて (N=6) その他 (N=8)	相手に色々隠している 学校以外で関わることがないため まったくくっついているとも思わない 家族よりは少し遠い位置づけにある 自分ではないから
《相手→自分》	「近づけ」 (N=43)	親しさ (N=18) 開示・理解 (N=13) 距離 (N=5) 信頼 (N=4) その他 (N=3)	相手にとっても大切だと思う 何でも私に話してくれていると思う 「相手」も私のことをある程度は近くかじってくれているとは思 私よりも信頼を彼がしていると思う 何年もともにいろいろなことを経験してきた
	「遠ざけ」 (N=55)	開示・理解 (N=16) 相手の友人関係 (N=11) 思いの差・自信のなさ (N=18) 嫌悪感・表面的 (N=3) その他 (N=4)	その人のことを、何でも話してはくれない気がする 自分以外にも友達がたくさんいる 自分を感じているよりは少し、離れている感じがした 向こうは、自分に嫌悪感を覚えている 少しけんそんをして離れた
	「同じ」 (N=26)	心理的距離平均=4.85 (SD=3.27)	相手も自分と同じように思ってくれていると思う

また同一の被調査者の回答に、「近づけ」と「遠ざけ」の両方が見られた場合（例；いろんなことを話すが、実際毎日いっしょじゃないから）と、「近づけ」あるいは「遠ざけ」について、複数の内容が見られた場合（例；つき合いは長いし、相手に言わないことはほとんどない）は別々に抽出したため、各カテゴリーによって総数が異なる。なお、評定は2名以上の一致を条件とした。次に《自分→相手》の「近づけ」「遠ざけ」、《相手→自分》の「近づけ」「遠ざけ」の各カテゴリーにおいて、その内容をKJ法による分類を行い、まとまりを代表する項目名をつけた。結果をTable 6に示す。なお、文中の“ ”内は項目名を、『 』内は記述内容を示し、文末（ ）内の数字は被調査者のIDである。

## 2. 結果及び考察

### (1) 自由記述の分類

《自分→相手》の「近づけ」は小計が最も多い101と

なり、項目は6となった。以下、項目を順に挙げる。第1に『今、一番仲の良い友達だから (20)』、『私が彼女を一番の親友だと思う (215)』というように、仲の良さ、親しさに関する記述が最も多く、“親しさ”と命名した。これは友人関係を築く上で基本的な感情と考えられる。調査1、2で関係の深さ尺度と関係親密度と心理的距離に強い関連が見出されたことから、やはり相手に親密さを感じていると心理的距離が小さくなるといえる。第2に『思ったことを大体言っているし、いろんなことを話せる相手 (214)』、『何でも話しているから。私の気持ちをよくわかってくれる (290)』というように、相手に自己開示することやその結果として理解されているとする記述がみられ、“開示・理解”とした。第3に『つき合いが長く親しい人 (214)』、『小学校以来の付き合いで、今も電話などで連絡を取り合っている (80)』というように、“つきあいの長さ”に関する記述が見られた。つきあいが長くなると、いろいろな経験を共にし、

またいろいろなことを開示し合うため、深い関係性が生まれ心理的距離が小さくなると考えられる。また長くつきあいが続くくらい気の合う相手といえ、そのような相手との心理的距離は小さいものになるのだろう。第4に『関係的に近いと思った(30)』、『どちらかというところ(218)』というように、距離や位置に関する回答が見られた。これを“距離”とした。これは測定方法からの連想、あるいは友人とのかかわりを距離という語で表すことになじみがあるためと考えられる。また、第5に『お互い信頼してる(46)』、『相手のことを信頼できるし、尊敬できるところもある(58)』というように、“信頼”に言及したものが見られた。信頼は友人に対する感情として示されており(榎本, 1999)、心理的距離における「近づけ」と関連していると考えられる。そして、第6に『結構同じような考え方をしていると思う(117)』というように、“考え方”に関する回答が見られた。回答数は少なかったが、価値観の類似は友人関係において重要なことと考えて独立した項目として分類した。

《自分→相手》の「遠ざけ」は小計が57で、項目はその他を含めて5となった。第1に『相手に色々隠している(1)』、『完璧には分かっているとは思わない(65)』というように、[近づけ]同様“開示・理解”という項目名とした。開示や理解が進んでいると感じると「近づけ」が起こるが、逆に開示や理解をそれほど行っていないと感じると「遠ざけ」が起こると考えられる。第2に『実際毎日いっしょじゃない(9)』、『学校以外で関わるのがないため(78)』というように、活動を共有する“時間・場面の限定”が挙げられた。友人といつでも一緒であることが理想なのだろうか。これまでこの“時間・場面の限定”について検討されておらず、今後視野に入れる必要があるだろう。第3に『まったくくっついていないと思わない(211)』、『踏み込めない部分もあるから(243)』というように、近づけなさや、踏み込めなさについての記述が見られ、“距離”に関わるものがまとめられた。また、第4に『家族よりは少し遠い位置づけにある(223)』、『彼氏よりは遠い(286)』というように、“他の関係と比べて”回答したものがまとめられた。友人に対する心理的距離を回答する際、家族や恋人と比較する被調査者がいることがわかった。そして、第5に上記のどこにも当てはまらなかったもので『自分ではないから(25)』、『たとえ古いつきあいで近づけすぎるのは彼に対して失礼のような気がした(61)』という回答が見られた。

《相手→自分》の「近づけ」は小計が43で、項目はその他を含めて5となった。その他以外の4つの項目は《自分→相手》の「近づけ」と同じものとなった。内容を順に見ていく。“親しさ”には、『彼に私は非常に頼られていると思う(91)』、『友達も自分とすごく仲良く

してくれている(20)』という記述が分類された。《自分→相手》の項目と比べると、内容はあまり変わらず、仲の良さ、親しさに関する記述であった。“開示・理解”には、『何でも私に話してくれていると思う(226)』、『それなりに僕のことを分かってくれていると思う(117)』という記述が分類された。“距離”には、『そんなに遠い存在ではない(226)』、『「相手」も私のことをある程度は近くかんじてくれているとは思っている(213)』という記述が分類された。“信頼”には、『私よりも信頼を彼がしていると思う(84)』、『自分なりに、相手から信頼されていると思う(58)』という記述が分類された。“その他”には『自分が「相手」に感じていることは、「相手」にも影響を与えていると思う(212)』などが見られた。全体的に《自分→相手》の項目と比べて内容に差は見られない。しかしながら、小計は最も少なく、《相手→自分》における「近づけ」の動きを感じることも、またそれを表明することは大学生にとって難しいものであるのだろうか。

《相手→自分》の「遠ざけ」は小計が55で、項目はその他を含めて5となった。《自分→相手》の「遠ざけ」と重なった項目は、“開示・理解”の1つのみであった。内容としては、『その人のことを、何でも話してはくれない気がする(275)』、『お互いに相談とかしらない(69)』というものが分類された。相手からの開示に限定があることや、自分も相手も相談といういわば深いレベルでの開示をしないこと、それほど理解し合っていないと感じられることが《相手→自分》における「遠ざけ」の動きとなるといえる。第2に“相手の友人関係”としてまとめられた。『自分以外にも友達がたくさんいる(11)』、『彼女には私以上に近い友人がいて、私は部活でいっしょに遊んでいるくらいの間柄だと思う(203)』という内容が見られた。《自分→相手》では“他の関係と比べて”という項目が見られたが、ここでは特に相手の(自分以外の)友人関係に関する記述が目立ったため、“相手の友人関係”と命名した。第3に“思いの差・自信のなさ”としてまとめられた。『自分が思っている程、向こうは思っていないかもしれないという不安があった(4)』、『自分が感じているよりは少し、離れている感じがした(6)』という記述が分類された。自分が思っているほど相手は思っていない、または自分と同じかどうか自信がないというもので、《相手→自分》の位置づけの難しさを示していると考えられる。第4に“嫌悪感・表面的”であり、『向こうは、自分に嫌悪感を覚えている(12)』、『ある程度乾いた友人関係(13)』という記述が分類された。今回の自由記述では表面的なものはごくわずかであった。想定した友人が親密な相手であったためと考えられる。

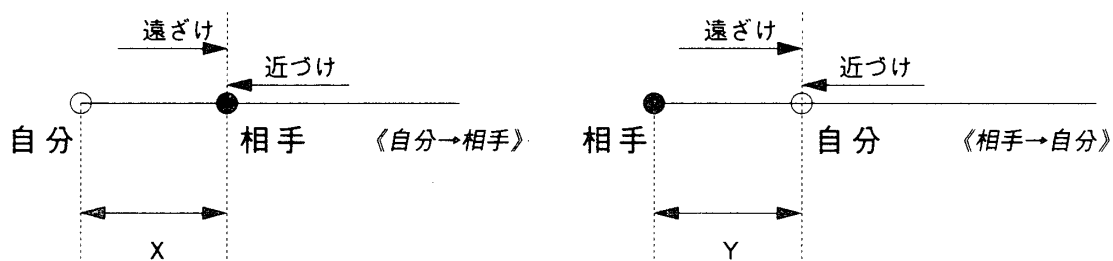
《相手→自分》においては、『相手も自分と同じよう



**Table 7**  
各カテゴリーにおける心理的距離の平均 (SD) と t 検定結果

	「近づけ」	「遠ざけ」	t 値
《自分→相手》	N=101 5.30 (5.54)	N=57 6.47 (4.03)	n.s
《相手→自分》	N=43 4.33 (3.02)	N=55 7.24 (3.55)	-4.78***

\*\*\*p<.001



**Fig.2** 心理的距離概念図

に思ってくれていると思う (42)』、『相手もまた自分が相手を位置づけているくらいところに自分を位置づけてくれていると思うから (230)』というように、『相手→自分』が『自分→相手』と同程度であるという回答が見られた。これは「近づけ」にも「遠ざけ」にも該当しない独立したものと考えられる。

### (2) 心理的距離の差の検定

《自分→相手》、《相手→自分》それぞれの「近づけ」「遠ざけ」に分類された回答を行った被調査者の心理的距離の平均と標準偏差を算出し、t検定によって比較した。結果をTable 7に示す。《自分→相手》では有意差は見られなかった。《相手→自分》では、「近づけ」の方が「遠ざけ」より心理的距離が小さいことが示された ( $p<.001$ )。したがって、一部ではあるが、測定方法の信頼性がある程度確保されたと考えられる。

### (3) 自由記述の特徴

(1)自由記述の分類では、「近づけ」と「遠ざけ」の両方が見られた場合と、「近づけ」あるいは「遠ざけ」について、複数の内容が見られた場合は別々に抽出した。前者について、「○○だけど△△」という表現が多く見られた。『非常に近い存在と思うから。でも自分と重なったり触れるほどではない』、『いろんなことを話す、実際毎日いっしょじゃないから』、『「相手」も私のこと

をある程度は近くかんじてくれているとは思うけど、自分と同じ程度かという自信がない』というものである。この表現から、近づこうとする動きと遠ざかろうとする動きが同時に起こり、心理的距離が決定されたと考えられる。したがって、心理的距離はFig.2のようにまとめられる。○が自分、●が相手を表し、『自分→相手』で○からのびている線分上に相手(●)が位置づけられる。同様に『相手→自分』では、●からのびている線分上に自分(○)が位置づけられる。それぞれの距離において、「近づけ」は左へ向かう動きで心理的距離を縮め、「遠ざけ」は右へ向かう動きで心理的距離を大きくすることを示している。その動きが拮抗したところに相手(または自分)が位置づけられ、心理的距離が決定する。

## V. まとめと今後の展望

本研究で見出された結果は以下のようにまとめられる。

①大学生の友人との心理的距離は、性別、相手の性別で様相が異なる。

②大学生の友人との心理的距離と、相手との関係の深さ、関係親密度、親密性との関連が示され、これによって、投映的測定方法の妥当性が検証されたと考えられる。

③大学生の友人との心理的距離における「近づけ」の

内容には、“親しさ”、“開示・理解”、“つきあいの長さ”、“距離”、“信頼”、“考え方”があり、「遠ざけ」の内容には、“開示・理解”、“時間・場面の限定”、“距離”、“他の関係と比べて”、“相手の友人関係”、“思いの差・自信のなさ”、“嫌悪感・表面的”があることがわかった。《相手→自分》においては心理的距離に有意な差があり、「近づけ」の方が「遠ざけ」より距離が小さいことがわかった。これによって投射的測定方法の信頼性がある程度確保されたと考えられる。

今後は、本研究で整理された心理的距離概念をもとに、大学生の友人関係について、友人ごとのかかわりに差異を捉え、またどのようにかかわりの調整を行っているかを明らかにするなどして理解を深めたい。

### 【謝 辞】

本論文は、九州大学教育学部に提出した卒業論文（平成9年度）の一部と、九州大学大学院人間環境学研究科に提出した修士論文（平成11年度）の一部をまとめ直したものです。ご指導くださいました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生、同助教授高橋靖恵先生に心より感謝いたします。また、調査へのご協力をいただきました大学生のみなさまに厚くお礼申し上げます。

### 文 献

- 天貝由美子（1996）：中・高校生における心理的距離と信頼感との関係．カウンセリング研究，29，130-134.
- 榎本淳子（1999）：青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化．教育心理学研究，47(2)，180-190.
- 石田靖彦（1998）：友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感．社会心理学研究，14(1)，43-52.
- 松井豊（1990）：友人関係の機能．齊藤耕二・菊地章夫編著，社会化の心理学ハンドブック．川島書店，283-296.
- 長沼恭子・落合良行（1999）：長沼・落合論文へのコメントをいただいて．青年心理学研究，11，71-74.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994）青年期の交友関係における同調と心理的距離．教育心理学研究，42(1)，21-28.
- 山口正二（1994）：教師の自己開示特性と心理的距離に関する研究．カウンセリング研究，27(2)，126-131.
- 山口正二・土屋泰生・藤本尚文（1996）：生徒と教師の心理的距離の改善に望ましいと判断される行動・態度に関する研究．カウンセリング研究，29，169-179.
- 山根一郎（1987）：心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析．心理学研究，57(6)，329-334.